

石見銀山の景観保全とその活用 —地域通貨「ソーマ銀」—

林 秀 樹

1. 世界遺産登録の暫定リスト

2000年12月17日、国の文化財保護審議会は、大田市と仁摩町、温泉津町にまたがる石見銀山遺跡を世界文化遺産登録の暫定リストに加えた。

石見銀山は、中世から約400年の採掘の歴史があり、最盛期には国内の銀産出量の五分の一を占め、世界に輸出されたと言われている。世界遺産登録の候補に産業遺跡が加えられたのは、国内では初めてとなる。石見銀山が世界の経済に大きな影響力を持ち、中世から近世の銀山の全容を良好に残している点が評価されたものである。

世界遺産の登録には、遺跡の復元と保護及び学術的な研究が重要であるが、爆発的に増加することが予想されるツーリストに対する対策と遺跡群の良好は保全技術の開発も急務であると思われる。

研究部会では、銀山遺跡が暫定リストへ加えられる直前である10月20日から21日わたって、石見銀山の景観と環境の評価をテーマに温泉津町を中心に現地調査を実施し、すばらしい歴史遺産とそれを取り巻く自然の美しさを体感した。



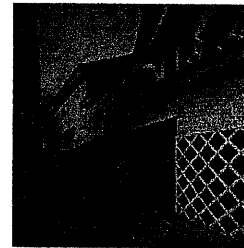
恵比寿神社（温泉津町沖泊）

石見銀山発見と同じ時代に創建。本殿は、室町時代の特徴的な建築様式である。海上の守護神。（損傷が激しい）

回船問屋のなまこ壁（温泉津町）

温泉津港には、北前船や天領船が寄港し、大いに賑わったといわれている。

（個人所有の家屋であるが、住人はいない。）



しかし、長期にわたって石見銀山遺跡を良好に維持するためには、多くの課題が存在することも理解できた。現地は、銀山を閉山して100年になろうとしており、採掘の最盛期から見ると300年以上経過していることから、「施設の老朽化」、「適正規模以上の施設群」「分散する施設群」などという問題を抱えていた。

遺跡の保全や活用のための施設整備についても緊急に取り組まなくてはならない課題は多い。しかし、石見銀山遺跡では、ハード面の整備を進めるだけでは施設の維持すら困難であり、ソフト面からの地域計画の必要性を痛感した。

2、石見銀山の景観の評価

石見銀山遺跡の景観や自然を象徴的な言葉で表現すると「Semi-natural（二次自然）」といえることができる。遺跡を取り巻く山や川、海にもすべて人の手がかかっている。かつては、多くの人々が歩いた道や宿場、信仰の対象となった社寺仏閣もすべて自然の中に点在している。

Semi-natural（二次自然）の代表である二次林や棚田などは、それが存在すること自体で特定の良好な自然を保全することができる。雑木林で氷期の動植物が保全されていることから明らかである。しかし、Semi-naturalを維持するためには、常日頃から人手をかけ、多様な手法を使ってその保全を図らなければ、その形態を維持することができない。

石見銀山遺跡の景観、環境について検討すると、Semi-naturalを保全するための課題と同様な問題が出てくる

【石見銀山遺跡が抱えている問題点】

- ・ 銀山は1923年に閉山しており、鉱山の施設は、ほとんど遺跡として地下に眠っているか、老朽化もしくは崩壊している。
- ・ 社寺仏閣などの建築物については、石見銀山の最盛期が1600年代の半ばまでであることから、その後の維持修繕ができていない施設も多い。
- ・ 人口減少の著しい当該地では、社寺仏閣等の規模が大きすぎ、また、数も多いため、現在の檀家や氏子等では経済的に維持ができない。
- ・ 歴史ある民家も空き家となっているところも多く、在住家屋でも、住居としての快適性が著しく悪い。
- ・ 施設が点在（大田市、仁摩町、温泉津町）しており、特に仁摩町、温泉津町には、核となるエリアがない。
- ・ 銀山街道などの土木施設は、利用者が少ないこともあって、崩壊の一途をたどっている。
- ・ 施設一つ一つが地味であり、観光的な魅力に欠ける。

一般に Semi-natural を保全するときには、ランドワークなどの手法が効果を上げるといわれているが、石見銀山遺跡の保全には、その手法では限界があると思われる。

3、地域通貨の導入の検討

石見銀山遺跡の保全をソフト面から解決する手法として、地域通貨の導入を検討した。地域通貨とは、特定の地域で通用する通貨である。最近では、環境問題に関心の高い地域で発行されたりして、話題となっている。

地域通貨としておもしろい話題を提供したのは、「エンデの遺言ー根源からお金を問う」というNHKのテレビ番組であった。ドイツのファンタジー作家であるミヒャエル・エンデは、代表作の「モモ」が30以上の言葉に翻訳され、世界で600万部発行されたことで知られている。番組の中では、彼は「利子を生まないお金、時と共に価値が減っていく

お金」の必要性を説いていた。貯め込まれて循環しない貨幣が問題であり、地域通貨の導入が必要であると言うのである。

石見銀山遺跡を地域経済の観点から考えると、地域通貨を発行する意味が見えてくる。そこで、石見銀山遺跡の維持を地域経済の観点から整理してみた。

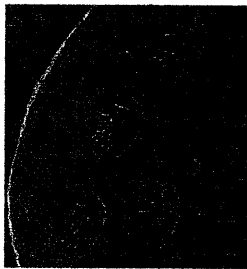
【石見銀山遺跡の経済】

- ・ 世界遺産候補リストに載ったことによる観光客の増大
- ・ 遺跡全体の価値は高く、ツーリストの満足度を高める仕掛けを作る必要性が大
- ・ 地域内でのツーリストの支出を地域全体の収入とし、遺跡を保全
- ・ 世界遺産へのツーリストは、高齢者も多く経済的余裕有り
- ・ 銀山遺跡は、一つ一つの施設の魅力は乏しく、単独で観覧料を徴収することは困難
- ・ 遺跡や観覧施設が点在しており、ツーリストが全容を把握できるサービスが必要
- ・ 施設が、宗教施設や個人所有のものが多く、公共援助に限界
- ・ 宿泊、飲食、売店等の売上げが民間活力活性化には不可欠

これらの問題を解決するために、割引券の配布、資料館等の共通観覧券の発行等を行っているところが多いが、利用方法が煩雑で、さらには共通観覧できる施設を選択できないなど利用者のニーズと乖離することも多い。

石見銀山遺跡周辺地域は、経済的に疲弊しており、早急に経済的な対策をとる必要がある。地域全体にお金を動かすことによって、地域の再生を模索する必要がある。

そのため、石見銀山遺跡で通用する地域通貨を「ソーマ銀」と命名し、その導入を検討した。



ソーマ銀

中世ヨーロッパの文献には、石見銀山産出の銀を「ソーマ銀」と称し、日本の代表的な銀と位置づけている。石見銀山の銀が世界に流通していた証である。名称の由来は、石見銀山が当時の佐摩村（大田市大森町）にあったため、「佐摩（さま）」を「ソーマ」と発音した結果であるといわれている。

「ソーマ銀」は、地域通貨として石見銀山遺跡エリアすべての施設で使える地域通貨である。ソーマ銀導入の目的は、石見銀山遺跡を来訪したツーリストに負担感が少ないまま消費拡大を求めるものである。

遺跡周辺は人口も少なく経済は低調な地域である。地域内での金銭の消費拡大は、地域活性化につながり、遺跡保全のためには不可欠である。

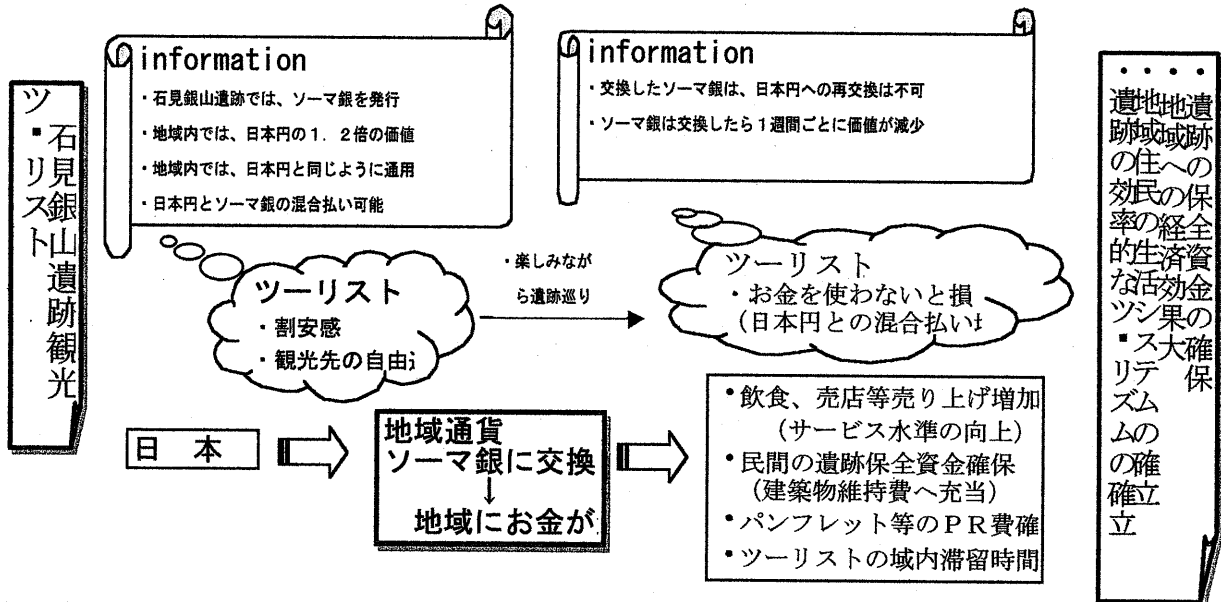
ソーマ銀は、日本円より割安とし、ツーリストの消費意欲を高めること交換レートを設定してみた。ソーマ銀で支払われる金額は、割引販売と同じであるが、地域全体での売上げ拡大は、地域経済の底上げとなり、銀山遺跡の保全費用と地域住民の生活費用の確保に充てられる。

【ソーマ銀の特徴と課題】

- ・ 日本円100円は、ソーマ銀120円
- ・ ソーマ銀から日本円へは交換はできない。(すべて使い切り、地域経済拡大)
- ・ ソーマ銀は時間と共に価値が減少(地域通貨の特徴)
- ・ 分かりやすい地図で示された利用圏域で通用(ソーマ銀発行時に配布)
- ・ ソーマ銀の利用者が割安感を持つため、金銭消費拡大
- ・ 効率的なソーマ銀の発券システムと兌換システムの整備が必要

4. 石見銀山遺跡を未来へ引き継ぐために

地域通貨(石見銀山ソーマ銀貨)とツーリストの動向



石見銀山を取り巻く景観を保全し、世界遺産として未来に引き継いでいくためには、多大な費用がかかる。その費用を捻出するために、地域通貨を発行し地域全体でその運営をはかろうというのが、今回の主張である。

地域が経済的に破綻すれば、広く点在する石見銀山遺跡は少しずつ姿を消すと思われる。特に、建築物は、そのほとんどが木造であることから、維持管理を怠ると容易に損壊する危険性は高い。

石見銀山遺跡を、常に保全活動が必要な「Semi-naturalな自然」と同等に位置づけたのは、そのためである。

我々が様々な地域計画を立案するとき、ランニングコストを考えなければならないのは当然である。修繕費の少ない施設づくりや電気代等の日常の経費を軽減する方向で検討することが多い。

しかし、今後の地域計画の策定に当たっては、利用者が満足行くサービス水準を確保し、利用者から可能な負担を求める計画を立案しても良いのではないかと考えている。